

III

学部・研究科等による 取組み

III-4 東京キャンパス

東京キャンパス学年暦 221

人文学部 223

学部レビュー

- 1 学生の受け入れ
- 2 教育課程
- 3 教育組織
- 4 学生支援
- 5 就業支援
- 6 研究活動
- 7 社会貢献
- 8 図書館〔東京〕
- 9 自己点検・評価
- 10 その他

2016 (平成28) 年度 東京キャンパス〔人文学部〕 学年暦

4 月		5 月		6 月	
1 金	健康診断 1年生オリエンテーションII 学生証登録	1 日	④	1 水	⑥
2 土	1年生オリエンテーションIII	2 月		2 木	⑦
3 日		3 火		3 金	⑧
4 月	入学式	4 水	憲法記念日 みどりの日	4 土	体育祭 (体育祭予備日)
5 火	① 前学期：講義開始	5 木	こどもの日	5 日	
6 水	①	6 金	④	6 月	⑨
7 木	①	7 土	④	7 火	⑨
8 金	新入生セミナー (2・3年生は休講日)	8 日		8 水	⑨
9 土	新入生セミナー (2・3年生は休講日)	9 月		9 木	⑨ 教職員健康診断
10 日		10 火	⑤	10 金	⑨
11 月	① 前学期 履修登録 (Sナビ) 締切	11 水	⑤	11 土	⑥
12 火	②	12 木	⑤	12 日	
13 水	②	13 金	⑤	13 月	⑩
14 木	②	14 土	⑤	14 火	⑩
15 金	①	15 日		15 水	⑩
16 土	①	16 月	⑥	16 木	⑩
17 日		17 火	⑥	17 金	⑩
18 月	②	18 水	⑥	18 土	⑨ 教職員特別研修会 第2回オープンキャンパス
19 火	③	19 木	⑥	19 日	
20 水	③	20 金	⑥	20 月	⑪
21 木	③	21 土	⑥	21 火	⑪
22 金	②	22 日	⑦	22 水	⑪
23 土	② 創立記念日 (通常授業日)	23 月		23 木	⑪
24 日		24 火	⑦	24 金	⑪
25 月	③	25 水	⑦	25 土	⑩
26 火	④	26 木	⑦	26 日	
27 水	④	27 金	⑦	27 月	⑫
28 木	④ 花まつり (1限)	28 土	⑦	28 火	⑫
29 金	③ 昭和の日 (通常授業日)	29 日	⑧	29 水	⑫
30 土	③	30 月	⑧	30 木	⑫
31 日		31 火	⑧		
7 月		8 月		9 月	
1 金	⑫	1 月		1 水	
2 土	⑪	2 火		2 金	
3 日		3 水	傘下校併願入試①	3 土	後学期 履修登録 (Sナビ) 締切
4 月	⑬	4 木		4 日	
5 火	⑬	5 金	(⑩) 試験・補講	5 月	
6 水	⑬	6 土	第4回オープンキャンパス	6 火	追試験
7 木	⑬ 孟蘭盆会 (2限)	7 日		7 水	追試験
8 金	⑬	8 月		8 木	追試験
9 土	⑫	9 火		9 金	
10 日		10 水		10 土	
11 月	⑭	11 木	山の日	11 日	AO入試1期
12 火	⑭	12 金		12 月	① 後学期：講義開始
13 水	⑭	13 土		13 火	①
14 木	⑭	14 日		14 水	①
15 金	⑭	15 月		15 木	①
16 土	⑬	16 火		16 金	①
17 日		17 水		17 土	①
18 月	⑮ 海の日 (通常授業日)	18 木		18 日	
19 火	⑮	19 金	海の日 (7/18) の振替休日	19 月	② 敬老の日 (通常授業日)
20 水	⑮	20 土		20 火	②
21 木	⑮	21 日		21 水	②
22 金	⑮	22 月		22 木	② 秋分の日 (通常授業日)
23 土	⑮	23 火		23 金	②
24 日		24 水	昭和の日 (4/29) の振替休日	24 土	②
25 月	⑯ 第3回オープンキャンパス	25 木		25 日	第6回オープンキャンパス
26 火	⑯ 試験・補講	26 金	成瀬祭 (Sナビ)	26 月	③
27 水	⑯ 試験・補講	27 土		27 火	③
28 木	⑯ 試験・補講	28 日	第5回オープンキャンパス	28 水	③
29 金	⑯ 試験・補講	29 月	後学期 履修登録 (Sナビ) 開始	29 木	③
30 土	⑮	30 火	創立記念日 (4/23) 振替休日	30 金	③
31 日		31 水			

10 月		11 月		12 月	
1 土	③	1 火	⑦	1 木	⑪
2 日		2 水	⑧	2 金	⑫
3 月		3 木	⑨	3 土	⑬
4 火		4 金	⑩	4 日	
5 水		5 土	⑪	5 月	⑭
6 木		6 日		6 火	⑮
7 金		7 月		7 水	⑯
8 土		8 火	⑫	8 木	⑰
9 日		9 水	⑬	9 金	⑱
10 月	④	10 木	⑭	10 土	⑲
11 火		11 金	⑮	11 日	⑳
12 水		12 土	⑯	12 月	㉑
13 木		13 日		13 火	㉒
14 金		14 月	⑰	14 水	㉓
15 土		15 火	⑱	15 木	㉔
16 日		16 水	⑲	16 金	㉕
17 月		17 木	⑳	17 土	㉖
18 火		18 金	㉑	18 日	
19 水		19 土	㉒	19 月	㉗
20 木		20 日		20 火	㉘
21 金		21 月	㉓	21 水	㉙
22 土		22 火	㉔	22 木	㉚
23 日		23 水	㉕	23 金	㉛
24 月		24 木	㉖	24 土	㉜
25 火		25 金	㉗	25 日	
26 水		26 土	㉘	26 月	
27 木		27 日		27 火	
28 金		28 月	㉙	28 水	
29 土		29 火	㉚	29 木	
30 日		30 水	㉛	30 金	
31 月		31 火	㉜	31 土	
1 日	元旦	1 水		1 水	
2 月	振替休日	2 木		2 木	
3 火		3 金		3 金	
4 水		4 土		4 土	
5 木		5 日		5 日	
6 金	講義開始	6 月		6 月	
7 土		7 火		7 火	
8 日		8 水		8 水	
9 月	成人の日	9 木		9 木	
10 火		10 金		10 金	
11 水		11 土		11 土	
12 木		12 日		12 日	
13 金		13 月		13 月	
14 土		14 火		14 火	
15 日		15 水		15 水	
16 月		16 木		16 木	
17 火	試験・補講	17 金		17 金	
18 水	試験・補講	18 土		18 土	
19 木	試験・補講	19 日		19 日	
20 金	試験・補講	20 月		20 月	
21 土	試験・補講	21 火		21 火	
22 日		22 水		22 水	
23 月	試験・補講	23 木		23 木	
24 火		24 金		24 金	
25 水		25 土		25 土	
26 木		26 日		26 日	
27 金		27 月		27 月	
28 土		28 火		28 火	
29 日				29 水	
30 月				30 木	
31 火				31 金	
1 日		1 水		1 水	
2 月		2 木		2 木	
3 火		3 金		3 金	
4 水		4 土		4 土	
5 木		5 日		5 日	
6 金		6 月		6 月	
7 土		7 火		7 火	
8 日		8 水		8 水	
9 月		9 木		9 木	
10 火		10 金		10 金	
11 水		11 土		11 土	
12 木		12 日		12 日	
13 金		13 月		13 月	
14 土		14 火		14 火	
15 日		15 水		15 水	
16 月		16 木		16 木	
17 火		17 金		17 金	
18 水		18 土		18 土	
19 木		19 日		19 日	
20 金		20 月		20 月	
21 土		21 火		21 火	
22 日		22 水		22 水	
23 月		23 木		23 木	
24 火		24 金		24 金	
25 水		25 土		25 土	
26 木		26 日		26 日	
27 金		27 月		27 月	
28 土		28 火		28 火	
29 日				29 水	
30 月				30 木	
31 火				31 金	

平成28年度 東京キャンパス（人文学部）レビュー

1. 平成28年度振り返り

【人文学部】

(1) 学生募集（取組み、成果）

学生募集については、教職員一丸となって取り組んだ結果、大学当局から求められていた定員の1.03倍の確保を実現できた。これは職員の高校訪問、教員の出前授業、オープンキャンパスの工夫などの結果であり、オープンキャンパスの参加学生数も増大している。

(2) キャリア支援（取組み、成果）

人文学部は今年の4月で全学年がそろい、4年生の就職率向上が最大の課題になってきた。そのため多くのキャリア支援講座や教員採用試験対策講座などを設けて、学生支援を行ってきたが、現段階では著しい効果が出ているとは言い難い。

(3) 正課活動（取組み、成果）

表現学科・歴史学科ともに特色ある授業を展開して、学生の満足度も向上している。授業は講義中心だけでなく、アクティブ・ラーニングなどの双方向性の形態を取り入れて満足度を向上させている。

(4) 正課外活動（取組み、成果）

両学科共に多くのフィールドワークを実施して、従来の座学中心の授業だけでなく、学外の施設に学生を連れ出して、色々な経験を積ませている。このことが表現学・歴史学に対する学生の興味を、飛躍的に向上させている。

【東京キャンパス】

人文学部の学生数の増加に伴って、ハード面で学生からの不満が出てきている。たとえば食堂が狭い、教室が狭いなどの意見が見られたが、食堂を6号館地下でも営業し、人数の多い授業は学生を2分割して対応するなどしたため、学生の不満も少なくなっている。

2. 次年度への課題、方策

- 前年度も次年度への課題としてあげたが、表現学科のアナウンサー・声優希望者、歴史学科の教員・学芸員希望者を、その職につかせることが出来るか否かが、募集を大きく左右するので、それをどのように実現できるかが大きな一番の課題である。そのためには対策講座の増設、学生に対する教員の個別指導などが考えられる。
- 人文学部は入学定員が45名定員増で145人定員になる予定である。増加分の人数確保は困難が予想されるが、オープンキャンパスの中身の充実、出前授業の増加、教職員一体となつての大学説明会など考えられる全てのことに取り組まないと、結果はかなり厳しいものとなるであろう。

以上

1 学生の受け入れ①〔募集・入試〕

関連委員会	募集・入試委員会
関連部署	東京アドミッションセンター
関連データ	学部・学科の志願者・合格者・入学者の推移（表12）

平成27年度大学年報

【次年度に向けた課題】

入学定員の厳格化に伴い、上位大学の受験層が3月入試で出願してくる可能性が増えてくるため、3月入試まで正規合格者が出せるように入学定員の管理を徹底する。

1 平成28年度 活動方針・目標

ACTION PLAN

(1) 方針

東京アドミッションセンターとして、人文学部の入学定員の確保と適切な入学試験の実施に努める。

(2) 目的

- ① 人文学部の入学定員を確保するため、出願者・オープンキャンパス参加者数の目標値を以下のように設定し、実現を目指す。

【目標値】

学 科	入学定員	出願者	OC参加者
歴史学科	40	300	700
表現学科	60	300	

- ② 受験生に対して人文学部の「アドミッションポリシー」を十分に理解してもらい、入学後のミスマッチを防ぐ。また、学修目的を明確にもった受験生を増やす。

- ③ 入試試験方式ごとに受験生及び高等学校が納得できるような厳正かつ公正な試験を実施する。

2 具体的計画

PLAN

(1) 入学定員の確保

歴史学科40名、表現学科60名、学部定員100名の確保。併せて学力レベルの高い受験生層の獲得を図り、学部の偏差値を上げる。（目標値：50以上）

(2) オープンキャンパスの適切な運営と実施内容の充実

盛況感を出すために短期大学部と同日開催とするが、来校者が必要な情報を収集できるよう導線づくりを徹底する。また、専任教員による体験型の模擬授業の充実を図り、学部・学科の学びをしっかりと来校者に伝える。

(3) 募集効果のある広報媒体の選定と実施

適切な広告費の支出を行う。広報時期、媒体の種類、対象等を考慮しながら与えたい情報が与えたい対象に届く広報展開を実施する。また、単年度の募集効果を見込むものだけではなく、次年度につながる広報展開も視野に入れる。広報媒体の効果測定は、資料請求数の増減ではなく、資料請求から出題までどのくらいの割合でつながっているかで行う。

(4) 適切な入試運営

危機管理体制を明確にし、円滑な入学試験実施体制を構築する。

3 取組状況

DO

取り組み状況は以下のとおりとなっており、文部科学省からの入学定員厳格化の影響もある

が、定員の確保は昨年と同様に達成した。

【目標値】

学 科	入学定員	出願者	OC参加者
歴史学科	40	341	936
表現学科	60	284	

4 点検・評価

CHECK

(1) 出願者数

当初に立てた目標に対して、歴史学科の出願者数は、大幅に上回ることができた。しかしながら、表現学科の出願者数については、目標の300名に16名満たない結果となった。これは、色々な要因が考えられるが、前年度の入試倍率との関係がひとつの要因としてあげられると考える。

(2) オープンキャンパス参加者

オープンキャンパスの参加者については、当初の目標であった700名を大幅に上回る結果となった。

また、オープンキャンパス参加者からの出願者についても目標としていた30%を越えることができた。

5 次年度に向けた課題

ACTION

これまで以上に入学定員については、厳格化がなされているため、入学定員の確保は、もとより、質の高い学生をしっかりとっていけるよう募集・入試委員会所属の教員とアドミッションセンター職員が一丸となって、実現させる。

教職員が一つにならなくては、募集活動・入試活動の実現は不可能なので、万全の協力体制を構築していく。

以上

1 学生の受け入れ②〔在籍管理〕

関連委員会	教学委員会
関連部署	学生支援部
関連データ	学部・学科の退学者数（表14）

平成27年度大学年報

【次年度に向けた課題】

人文学部の入学定員は両学科で100名と少人数のため、退学率に換算すると必然的に率が高くなる。このことから、いかに退学者を出さないかの工夫が必要となる。

定員充足率の厳格化が示される中、退学者0名にするため教職員が一体となり、入学者数イコール卒業生数とするべく、学生支援体制を強化する。

1 平成28年度 活動方針・目標

ACTION PLAN

- (1) アドバイザーやゼミ担当教員が学生一人一人に対し必要に応じて相談や指導を行うことで学修意欲の低下を防止する。さらに学生支援部と学生に関する情報を共有化し指導を強化する。
- (2) 少人数の特性を活かし、きめの細かい学生指導を実施することで退学者を出さないように努める。

2 具体的計画

PLAN

- (1) 前期と後期の始め5週目までに出席状況を把握し、アドバイザーやゼミ担当教員を通して欠席の多い学生に面接指導を行う。
- (2) GPA制度に基づいた学修指導を実施する。
- (3) 学内において学生の情報の共有化を図る。

3 取組状況

DO

前期と後期の始めに開講する全科目の出席状況調査を行い、欠席の多い学生にアドバイザーによる面接指導を行った。

GPA制度による成績不振学生による面接指導を以下のとおり実施した。

対象者	歴史学科	表現学科	歴史学科	表現学科	表現学科	前学期	後学期	後学期	後学期
1.0未満学生	1.0未満学生	1.0未満学生	1名	0名	0名	0名(1年)	0名	0名	0名
			3名	0名	0名	0名(2年)	0名	0名	0名
			0名	0名	0名	0名(3年)	0名	0名	0名
1.0未満学生	1.0未満学生	1.0未満学生	1名	0名	0名	0名(1年)	0名	0名	0名
			4名	1名	1名	1名(2年)	1名	1名	1名
			1名	0名	0名	0名(3年)	0名	0名	0名
2期連続1.0未満学生	2期連続1.0未満学生	2期連続1.0未満学生	0名	0名	0名	0名(1年)	0名	0名	0名
			0名	0名	0名	0名(2年)	0名	0名	0名
			0名	0名	0名	0名(3年)	0名	0名	0名
2期連続1.0未満学生	2期連続1.0未満学生	2期連続1.0未満学生	0名	0名	0名	0名(1年)	0名	0名	0名
			1名	1名	1名	1名(2年)	1名	1名	1名
			0名	0名	0名	0名(3年)	0名	0名	0名
3期連続1.0未満学生	3期連続1.0未満学生	3期連続1.0未満学生	0名	0名	0名	0名(1年)	0名	0名	0名
			0名	0名	0名	0名(2年)	0名	0名	0名
			0名	0名	0名	0名(3年)	0名	0名	0名

4 点検・評価

CHECK

(1)退学者の内訳							
平成27年度の退学者	歴史学科	1年	4名	表現学科	1年	0名	
		2年	0名		2年	2名	
平成28年度の退学者	歴史学科	1年	3名	表現学科	1年	4名	
		2年	0名		2年	2名	
		3年	0名		3年	4名	
(2)退学者事由							
平成27年度	進路変更		4名				
	就学意欲の低下		1名				
	体調不良		1名				
平成28年度	進路変更		3名				
	就学意欲の低下		2名				
	体調不良		3名				
	経済的困窮		1名				
	その他		4名				
(3)入試別退学者状況							
		平成27年度		平成28年度			
AO I期		1名		3名			
AO II期		2名		3名			
AO III期		2名		1名			
AO IV期		0名		1名			
公募推薦		0名		4名			
指定校		0名		1名			
一般		1名		0名			

5 次年度に向けた課題

ACTION

- (1) 昨年度に比較して、休学・退学者数が増加している点が問題である。
- (2) この点を改善するためには、教学委員会・学科教員・学生支援部職員が一体となって学生支援体制を強化することが必要である。
- (3) 具体的には両学科のアドバイザー教員やゼミ担当教員に対し、ただ単に問題ある学生への速やかな対応を求めるだけでなく、対応の方法それ自体について情報の共有化を図り、必要に応じて相互にアドバイスを行うなど対処の方法を工夫する必要がある。

以上

2 教育課程①〔歴史学科〕

関連委員会	教学委員会・教育向上委員会
関連部署	学生支援部
関連データ	

平成27年度大学年報

【次年度に向けた課題】

- (1) 科目の状況に応じた多様なアクティブ・ラーニングの内容をシラバスで言及する必要がある。
- (2) アクティブ・ラーニングにおいて学生主導の形をさらに進める必要がある。
- (3) 各科目の到達目標を確認し、カスタマイズされたルーブリックがこれに合致しているかどうか、確認する必要がある。
- (4) 地域貢献を視野に入れた教室外プログラムの開発にあたっては、学生だけではなく自治体や地域住民との連携・協働が必要である。

1 平成28年度 活動方針・目標

ACTION PLAN

(1) 方針

- ア 専門分野における基礎的知識を自らの手で体系的に理解できるように、歴史学を構成する主要分野に関する基礎的な知識を教授する。
- イ 各専門分野に結びつく幅広い内容や専門的スキルを修得させる。
- ウ 理論的知識や能力を実務に応用できるような能力を開発する。
- エ 歴史学の学問体系の理解の基に、歴史学の分野に関する基本的知識を自らの手で体系的に理解できるようにし、これらを総合的に実践できるような能力を身につけさせる。

(2) 目標

- ア 前期の段階で、アクティブ・ラーニングを導入している科目の50%以上において、学生がより主体的に取り組むことができるように運営形態に工夫を加える。
- イ 前期の段階で、学科独自のルーブリックを活用している科目の50%以上において、学生が自らの手で自らの成長を確認できるように内容に改善を加える。
- ウ 後期の段階で、地域貢献を視野に入れ、地方自治体を始めとする地域の人々と連携しながら教室外プログラムを2つ以上開発する。

2 具体的計画

PLAN

- (1) 前期の段階で、学生がより主体性を発揮できるアクティブ・ラーニングのあり方について学科会等で検討し学生が参加できる環境を整える。
- (2) 前期の段階で、学科独自のルーブリックが学生間において互いを評価できるものとなっているかどうか、学科会等で検討を加える。
- (3) 後期の段階で、教室外プログラムの実施に先立ち、必要に応じて地方自治体を始めとする地域の人々と協議を行う。

3 取組状況

DO

- (1) 授業の主役は教員ではなく、学生であるという認識のもとに学生の主体性がすべての科目で発揮できるように工夫を重ねてきた。その一環として、フィールドワークの成果の情報発信については、学生にブログの文章を書かせた。
- (2) 歴史調査実習の振り返り、グループ発表の場においてルーブリックを活用し、学生同士で相互評価などを行った。
- (3) 八潮こども夢大学で「くらべてみよう昔の暮らし」と題し、学生自身が教える立場となり、八潮市内の小学生に歴史を教える試みを行った。その際に、学科内及び八潮市教育委員会と

の入念な事前打合せを行った。

4 点検・評価

CHECK

- (1) 前期の段階でアクティブ・ラーニングを導入している科目のすべてにおいて、学生が主体的に取り組むことができるように運営形態に工夫を加えることができた。
- (2) 前期の段階で、学科独自のアクティブ・ラーニングを活用している科目のすべてにおいて学生が自らの手で自らの成長を確認できるように内容に改善を加えることができた。
- (3) 後期の段階において、淑徳祭におけるゼミ単位の研究発表会を実施できた。この研究発表会において、学生の保護者との意見交換がなされたことは特筆に値する。
- (4) 後期の段階において、地域貢献を視野に入れ、地方自治体を始めとする地域の人々と連携しながら開発できた教室外プログラムは一つだけであった。

5 次年度に向けた課題

ACTION

- (1) 今年度より淑徳祭においてゼミの研究発表会を実施したが、その際の運営についても学生主体で実施するように努めた。しかし、初めての試みということもあり、時には教員が細部にわたって指導する場面もあった。次年度は、学生に一層の主体性を発揮させるための工夫が必要である。
- (2) また地域貢献を視野に入れるならば、歴史学科の学習成果のアセスメントについて、大学だけで完結するのではなく大学に関わりを持つステークホルダーや地域社会の中での評価のなされ方が必要になってくると言えよう。

以上

2 教育課程②〔表現学科〕

関連委員会	教学委員会
関連部署	学生支援部
関連データ	

平成27年度大学年報

【次年度に向けた課題】

- (1) 演劇の授業においては、演劇発表後に学びを定着させるための振り返り、言語化をさらに行う必要がある。発表環境を整えることにも、事務局と連携して取り組みたい。
- (2) アクティブ・ラーニング、特にPBLにおいては、効果的な学びにつなげる授業の設計に課題が残る。理論と演習をいかに連携させるか、さらなる体系化が必要である。
- (3) 課題の難易度の設定、成果物の発表方法、成果に対するフィードバックなどを検討する必要がある。

1 平成28年度 活動方針・目標

ACTION PLAN

・方針

学部開設3年目を迎え、いよいよゼミならびにキャリア支援が本格化する。ゼミ担当教員とキャリア支援室が連携しての就職指導の体制を確立する。同時に完成年度後を見据えて、淑徳大ならではの「表現学科」の特色を再定義し、年度内にカリキュラム再編の方針を固める。

・目標

- (1) ゼミと就職支援の連携を図る。
- (2) 表現学科カリキュラムの見直しを行う
- (3) 他大学にはない特色あるアクティブ・ラーニングを開拓し、教育効果を上げると同時に、受験生を引きつけるPR材料とする。
- (4) 日本語の基礎学力向上を目指す

2 具体的計画

PLAN

- (1) 各ゼミにて、年間2回のキャリア支援面談ならびにアンケートを実施する。この情報をキャリア支援室と共有し、連携しながらキャリア支援を行う。
- (2) 完成年度以降のカリキュラム見直しを進め、年度末までには方針を固める。
- (3) 全教員会などでアクティブ・ラーニングの手法の情報共有を進める。専任教員は、企業や自治体と組んでのPBLも積極的に進める。
- (4) 表現学科全学生が2年生修了時までに日本語検定の3級以上取得を目指して働きかける。

3 取組状況

DO

- (1) 各ゼミでのキャリア面談結果をキャリア支援室と共有し、密に連絡を取り合い、学生の状況を把握した。春休み前また夏休み前に、教員自らインターンシップ研修を行った。キャリア支援室が行うキャリアアワー以外にも、教員主催のキャリア講演会を数回実施した。
- (2) 完成年度以降のカリキュラム見直しについては、学科内で議論を進めるも、見直し時期の1年先延ばしにより、年度末の議論はいったん休止とした。
- (3) ほぼすべての課目において、アクティブ・ラーニングを実施した。専任教員を中心にPBLにも取り組んだ。特に連携協定を結ぶ板橋区、また埼玉県八潮市と連携しての取り組みが進展した。板橋区選挙管理委員会と連携しての若者向け選挙啓蒙冊子の作成、地元警察署と連携しての高齢者向け詐欺防止企画立案など、ゼミ毎に深い演習が行われた。企業と連携して課題解決型広告プラン作成といったPBLもさらに発展させた。

- (4) 日本語の科目はもちろんのこと、それ以外の課目においても日本語の基礎学力の向上を図った。

4 点検・評価

CHECK

- (1) ゼミとキャリア支援室との連携という点では達成できたが、ゼミ毎に表現系の分野への就職を支援するという点においては、十分だったとはいえない。
- (2) 完成年度以降のカリキュラム見直しは、継続して行う必要がある。
- (3) アクティブ・ラーニング、とりわけPBLについては意欲的に取り組み、教育成果を上げることができた。特徴ある取り組みを学外発信したことも、受験者増、オープンキャンパスの来場者増を達成する一助となったと思われる。
- (4) 日本語検定3級合格者は6割程度にとどまり、今後も日本語基礎力の向上に努めると同時に受験を促すことが必要である。

5 次年度に向けた課題

ACTION

- (1) 完成年度を迎えて、ゼミとキャリア支援室と連携しての就職支援体制をさらに強固なものとする。
- (2) 完成年度以降のカリキュラムの見直しを進める。
- (3) 表現学科の特色あるアクティブ・ラーニングの開発を進めるとともに、継続実施を可能にする仕組みづくりを検討する。
- (4) 日本語検定3級合格を必修科目の単位取得の条件とするなど、合格を促すための対策を検討する。また受験料の補助も併せて検討する。

以上

3 教育組織①〔歴史学科〕

関連委員会	教学委員会・人事委員会
関連部署	総務部・学生支援部
関連データ	

平成27年度大学年報

【次年度に向けた課題】

- (1) カリキュラムの再編や3つのポリシーの見直しを行う前提として、本学歴史学科の独自性を一言で言うと、どのようなものとなるのか、本学歴史学科の目指す方向性を明らかにする。
- (2) (1)の作業を前提として、カリキュラムに再編案を作成し、その上で、歴史学科を構成する専任教員の専門分野を見直し、不足している分野にどのような形で対応していくべきか。この点について学科としてのプランを提示する。

1 平成28年度 活動方針・目標

ACTION PLAN

- (1) 現行の歴史学科の教育体系の問題点を抽出し、改善に向けて検討する。
- (2) 平成28年度末までに現行カリキュラム再編に向けての学科として素案を提示する。

2 具体的計画

PLAN

- (1) 学科長及びゼミ担当教員によるカリキュラム再編のためのプロジェクトチームを始動させる。
- (2) 週1回のペースでカリキュラム再編に向けての検討会議を実施し、日本史コースと東洋史コースの専門科目について再編案を作成する。
- (3) その際に、全学を挙げて進めている3つのポリシー作成の動きを踏まえたものとする。

3 取組状況

DO

- (1) プロジェクトチームの組織化と会議の定例化を実現できた。
- (2) カリキュラムの再編案作成にあたっては、特に歴史学の研究の基礎となる史料講読などの演習の充実化、及び高等学校との接続教育などのあり方について検討した。
- (3) カリキュラム再編を行ったと仮定した場合に現行スタッフではカバーできない領域、分野は何か、この点について検討を行った。

4 点検・評価

CHECK

- (1) 全学を挙げて作成した3つのポリシーとも連動するカリキュラム再編に向けての学科としての素案を作成することができた。
- (2) あくまでも学科レベルにとどまっており、今後は、募集入試、学生厚生、キャリア支援などさまざまな観点からの検討が必要である。

5 次年度に向けた課題

ACTION

- (1) 歴史学科としては、現行カリキュラムの再編を平成29年度末までに完了させることを目標に取り組んできたが、法人及び大学の方針により、学科定員の増員に向けての取り組みを優先させることとなった。
- (2) 定員増により、歴史学科がこれまで取り組んできたアクティブ・ラーニングなどについてもその実現のために一層の工夫が望まれることになる。また、学生確保のためにより魅力的なカリキュラムを策定する必要がある、定員増に向けての動きと連動する形で、カリキュラム再編に向けての学科案をよりレベルアップする必要がある。

以上

3 教育組織②〔表現学科〕

関連委員会	教学委員会・人事委員会
関連部署	総務部・学生支援部
関連データ	

平成27年度大学年報

【次年度に向けた課題】

- (1) 表現分野で現在も活躍する実務家の兼任講師の場合、仕事の都合で継続が難しい場合もある。早めに教員の配置計画を進める必要がある。
- (2) いよいよ就職活動が始まる。学生の社会人基礎学力向上に向けて、完成年度に向けて、教員間のさらなる連携が必要である。

1 平成28年度 活動方針・目標

ACTION PLAN

・方針

完成年度に向けて、1年次から4年次の全科目に適切な教員を配置する。専任教員、兼任講師ともに表現学科の方向性を共有し、特徴を打ち出せる教育体制を整える。

・目標

- (1) 完成年度に未定の兼任講師については、早急に適切な教員を配置する。
- (2) 完成年度のゼミ体制について、早急に方針を固めて学生に告知する。

2 具体的計画

PLAN

- (1) 夏までに完成年度の教員体制の方針を定め、秋には全担当教員を決定する。
- (2) 夏までに29年度のゼミ体制をかため、10月に説明会を行い、11月に選考、12月発表の流れとする。

3 取組状況

DO

- (1) 年内には兼任講師を固めるも、年度末に不測の事態が起こり、急きょ体制を立て直す必要に迫られた。兼任講師の先生方の協力も得て緊急事態を乗り切ることができた。
- (2) 29年度に向けてのゼミ体制づくりに関しては、予定通り進めることができた。ただし、兼任講師2人にゼミを担当してもらうという緊急体制をとらざるを得なかった。

4 点検・評価

CHECK

緊急事態を乗り切り、結果的には経験豊富な多彩な兼任講師を迎えることができた。

5 次年度に向けた課題

ACTION

完成年度以降、専任教員が2人退任することを踏まえて、早めに専任教員の体制を固める必要がある。新任教員が多い中で、学科会の方向性の共有、兼任講師との情報共有をさらに進めることが求められる。

以上

4 学生支援

関連委員会	教学委員会
関連部署	学生支援部
関連データ	奨学金給付・貸与状況（表15）

平成27年度大学年報

【次年度に向けた課題】

人文学部の完成年度までに毎年段階的に在籍学生数が増加するため、東京キャンパス全体で計画的に学生支援体制をととのえていく。

1 平成28年度 活動方針・目標

ACTION PLAN

- (1) 在籍学生が増加した後も学内の施設を有効に活用できるように支援を行う。
- (2) 学生が健全で有意義な学生生活を送ることができるように学習の推奨及び学生生活の支援を行う。

2 具体的計画

PLAN

- (1) 入学前教育の実施
- (2) 奨学金給付者の適正な選考
- (3) サークル、学生諸団体の活動支援
- (4) 体育祭の運営実施の支援
- (5) 淑徳祭の運営実施の支援

3 取組状況

DO

- (1) 入学前教育の実施について
 - ア 合格者向けの入学前教育として、課題図書感想文提出、新聞ノート作成を実施した。
 - イ 入学前セミナーとして大学での学び、大学生活、学科別セミナーを実施した。
- (2) 新入生セミナーの実施について
 - ア 新入生向けの導入教育として、建学の精神を理解し、教職員及び学生相互の親睦と交流を図るために実施した。本年度は、歴史学科1年生41名、表現学科1年生62名の合計103名が参加し、2年生からピアカウンセラーとして5名、3年生からピアカウンセラーとして2名が同行した。
 - イ セミナー内のプログラムは、ピアカウンセラーの学生が実施前に複数回の打合せを重ねながらレクリエーションを企画・立案し、新入生からの評価も概ね満足度が高いものとなった。
- (3) 奨学金給付者の適正な選考について

本年度の奨学金給付者の内訳は以下のとおりである。

(内訳)

・淑徳大学一般給付金	17名(歴史学科6名、表現学科11名)
・淑徳大学貸与奨学金	0名(歴史学科0名、表現学科0名)
・GPA成績上位者 前学期	10名(歴史学科3名、表現学科7名)
後学期	9名(歴史学科3名、表現学科6名)
・GPA成績向上者 前学期	3名(歴史学科1名、表現学科2名)
後学期	6名(歴史学科3名、表現学科3名)

上記奨学金給付者の選考にあたっては、GPA、経済的状況をもとに、学部長・学科長・教学委員長により選考を実施した。

- (4) サークル、学生諸団体の活動支援について
学生向けにサークル立ち上げ時の助言と支援を行った。
(登録サークル数) 35団体(継続22、新規13) 2016.11.16現在
- (5) 体育祭の活動支援について
ア 本学3号館アリーナにおいて、1～3年生の希望者によるドッジボール大会を実施した。
イ 終了後、学生食堂において、教員と学生の親睦を目的とする昼食会を実施した。
- (6) 淑徳祭の運営実施の支援について
ア 今年度も短期大学部と合同開催で実施した。
イ 実施にあたっては淑徳祭実行委員会を組織し、学科3年生が実行委員長となって短期大学の学生と共同で運営を行った。
ウ 1年生は、歴史学科及び表現学科の5クラス全部が企画に参加した。
エ 3年生は、ゼミ単位で新たに研究発表会を実施した。
オ さらにサークル活動発表の場として、パネルの展示、作品発表会、映画上映など団体の発表や展示が行われた。

4 点検・評価

CHECK

- (1) 入学前教育の実施について
ア 入学前教育
(ア) 課題図書提出状況(対象:当該年度の年内に実施した入試における入学手続き完了者)
掲出対象者 64名 提出者 63名
(イ) 入学前セミナー参加状況(対象:セミナー実施日までの入学手続き完了者他)
対象者 105名(辞退者含む) 参加者 87名
(ウ) 英語試験(対象:入学手続き完了者)
対象者 105名(辞退者含む) 受験者 96名
上記以外に、入学手続き完了者に新聞学習を課している。
イ 課題図書、新聞課題に関しては、大学の学修に必要な活字を読む習慣を身につけることを目的とし、英語試験は高校までの英語の習熟度を測定することを目的としている。
ウ 人文学部で実施している入学前教育は同様の内容で4年間継続的に実施してきた。課題提出、セミナー参加率も決して低くはないが、問題はそれが入学後の学修にどのような形で活かされたのかという点であろう。この点について、今後、内容・目的・成果など検証についてPDCAサイクルで多角的に検討していく必要がある。
- (2) 奨学金給付者の適正な選考について
選考においてとくに問題なし。
- (3) サークル、学生諸団体の活動支援について
ア 学部開設の初年度から多くのサークルが立ち上がっているが、活発に活動しているサークルとあまり活動していないサークルとの差が徐々に明らかになりつつある。
イ 東京キャンパスは運動施設や設備が他キャンパスに比較して確保しにくい状況下にある。
- (4) 体育祭の運営実施の支援について
ア 今年度は教員がどのような形で関わっていくべきかといった点について問題を残した。
イ 専任教員全員の参加が原則ということであれば、ただ単に学生に対して声援を送るだけではなく、何らかの役割分担が必要との声が寄せられている。
- (5) 淑徳祭の運営実施の支援について
ア 学部開設3年目ということもあり、学生の実行委員の運営には格段の進歩が見られる。
イ 今後はさらに学生が主体的に運営できるような支援を行うべきである。

5 次年度に向けた課題

ACTION

次年度はいよいよ完成年度を迎える。3年間において蓄積された成果と課題を踏まえ、学生が主体的に大学生活に取り組み、有意義な成果を得ることができるよう東京キャンパス全体で組織的かつ計画的に学生支援体制をととのえていく。

以上

5 就業支援

関連委員会	キャリア支援委員会
関連部署	キャリア支援室
関連データ	就職指導・支援行事等（付表4）、課外教育補助等（付表5）

平成27年度大学年報

【次年度に向けた課題】

- (1) キャリア支援ガイダンスの出席率をあげる。
- (2) キャリア支援ガイダンスの内容を精査し、学生の意欲に応えることができるように改善すべき点を改善する。
- (3) 基礎学力の充実のためにSPIに関わるカリキュラムを用意する。
- (4) 教員・学芸員・マスコミ志望の学生に対し、難関であることを認識させた上で、進路選択に対して広い視野で取り組むことができるように指導する。
- (5) 教員・学芸員・マスコミなどの分野に対して、少しでも可能性のある学生については、学科とキャリア支援室・支援委員会が一体となって指導する。
- (6) 埼玉キャンパス、千葉キャンパスにおけるキャリア支援の取り組みに学びながら、東京キャンパス独自のキャリア支援の進め方を確立する。

1 平成28年度 活動方針・目標

ACTION PLAN

(1) 方針

- ア 平成29年度卒業生就職率90%以上を達成するために、学生の強みと弱みを把握し、学生自身にもそれを認識させながら、強みを伸ばし弱みに対する底上げを行う。
- イ 学生の個性を尊重し、本人自身が主体性を持って進路を選択できるように支援する。
- ウ 学生が進学時に希望していた職業及び学科で学んだことが活かせる職業について多くの情報を提供し、学生自身が多様な選択をできるようにする。
- エ 困難な進路をあえて選んだ学生については、現実を直視させると同時に、本人の真剣度を確認した上で、必要に応じて最大限の支援を行う。

(2) 目標

- ア 就職活動時の第一関門である筆記試験を突破できるように不足している基礎学力を補充する。1年次に30%、2年次に50%、3年次に80%の正答率を上げることができるよう指導する。
- イ 学生主体の職種研究の一環としてインターンシップの積極的な参加を促す。参加率50%以上を目指す。
- ウ キャリア支援講座への平均出席率について、1年生50%以上、2年生70%以上、3年生80%以上を目指す。

2 具体的計画

PLAN

- (1) 全ての学年で複数回一般常識テストを実施し、学生個人にそれぞれ弱点を把握させ、それが克服できるように個別に指導を実施する。特に本学部の学生が苦手とする理数系の科目については、その領域を専門とする教員と連携し重点的に支援する。
- (2) インターンシップの重要性について、各学年のキャリア支援講座で喚起する。また各学科教員と連携し、学科教育と深く関わる職種についてのインターンシップ先を開拓する。
- (3) 学科におけるアドバイザー教員、ゼミ担当教員と連携して、キャリア支援講座に必ず出席するように繰り返し注意を喚起する。また、学生の保護者に対しても協賛会総会などの場を通してキャリア支援講座の重要性について口頭で述べると共に、必要に応じて文書、Sナビなどの通信手段によって連絡する。

3 取組状況

DO

- (1) アドバイザー及びゼミ担当教員に指導の徹底を委員会として要請した。
- (2) オリエンテーションなどの機会を通して、採用試験に直結する対策講座の受講は必須であることを学生に周知するように努めた。
- (3) 保護者に対して進路選択の重要性を認識してもらうように努力した。

4 点検・評価

CHECK

- (1) アドバイザー及びゼミ担当教員との面談は100%実施できたが、キャリア支援室を訪問し面談を受けた学生の数はいまだ全体の70%弱にとどまっている。
- (2) 公立学校教員採用候補者選考試験対策講座を開講したが、目標である受講率50%以上を達成できなかった。
- (3) キャリア支援講座への平均出席率について、1年生50%以上、3年生70%以上、3年生80%以上を目指したが達成できなかった。

5 次年度に向けた課題

ACTION

- (1) 次年度の課題として、キャリア支援室の利用について、ゼミ担当教員に漫然と依頼するのではなく、学生をキャリア支援室に行かせるための情報提供をゼミ担当教員に行うなどきめの細かい連携が必要である。
- (2) 具体的には、必要に応じてゼミの教員が引率する形でゼミごとにキャリア支援室を訪問し、ガイダンスを受けさせる方法が考えられる。
- (3) あるいはキャリア関連の科目「社会的・職業的自立」I・IIなどにおいて、担当教員と事前に調整しながら、授業の中でキャリア支援室の利用方法のガイダンスを行う方法もある。今後、このような形で学生にとってキャリア支援室をより身近な存在として活用できるように工夫を重ねていく必要がある。
- (4) また、インターンシップの支援についても組織的計画的に実施しなくてはならない。

以上

6 研究活動

関連委員会	自己点検評価委員会
関連部署	総務部、教育研究支援センター
関連データ	淑徳大学人文学部研究論集第2号、科学研究費の採択状況（表27）

平成27年度大学年報

【次年度に向けた課題】

- (1) 博士号未取得者に対し、博士号が取得できるように環境整備を含めた支援を行う。
 (2) 学科会などにおいて適宜、個々の教員に研究の中間報告をさせる。
 (3) 教育や学内行政とバランスをとりながら、学科内において個々の教員がコンスタントに研究発表できるような環境作りを行う。

1 平成28年度 活動方針・目標

ACTION PLAN

- ・方針
 - (1) 外部資金獲得を念頭においた研究を企画・立案する。
 - (2) 個々の教員が、教育活動に連動した研究目標を設定し研究業績を積み重ねる。
- ・目標
 - (1) 専任教員全員が、外部の研究費助成金に積極的に応募する。
 - (2) 専任教員全員が、それぞれの専門分野で著書、論文、学会発表を行う。

2 具体的計画

PLAN

学科長は、専任教員全員が外部の研究費助成に応募するよう促す。個々の研究テーマや進め方に関して助言を行う。

3 取組状況

DO

専任教員14人のうち3人が科学研究費補助金の申請を行い、1件が採択された。また現在、2人の教員が科研費での研究を継続している。

4 点検・評価

CHECK

科学研究費補助金申請の採択率を上げるために、各教員はさらに学会誌、紀要への論文投稿に取り組むなど、さらに研鑽を重ねる必要がある。

5 次年度に向けた課題

ACTION

教育と研究のバランスをとりながら、各教員が研究を続けることができる環境づくりを行う。

以上

7 社会貢献

関連委員会	教学委員会、教職運営委員会、ボランティアセンター
関連部署	学生支援部、ボランティアセンター
関連データ	

平成27年度大学年報

【次年度に向けた課題】

- (1) 自治体との連携を行う前提として、東京キャンパスにおける窓口を一本化する必要がある。
 (2) 社会貢献にあたっては、我々は何ができるか、何をしたいのかという観点だけではなく、地域住民や自治体が大学に求めていることは何か、こういった点を念頭に置いて活動を展開していく必要がある。

1 平成28年度 活動方針・目標

ACTION PLAN

・活動方針

本学と包括連携を結んでいる板橋区をはじめ、他の地方自治体とも連携し、地域社会でのボランティア活動の機会を広げる。

・目標

関係諸機関と協議をしながら、地域活動を通して学びにつながるプロジェクトを企画運営する。地域社会へ貢献する精神も育む。

2 具体的計画

PLAN

- (1) 板橋区役所、板橋区教育委員会の関係各部署と協議し、地域に根差した活動で学生が貢献できる活動を選定する。
 (2) 埼玉県八潮市など、他の自治体との連携も探る。
 (3) 学生サークルなどによる、主体的な地域貢献活動を後押しする。

3 取組状況

DO

- (1) 板橋区内の小学校、中学校に学生の学習支援ボランティアを派遣した。またゼミ毎に板橋区と連携しての演習を行い、高齢者に対する詐欺解決法を調査企画したり、若者向け選挙意識啓蒙冊子を作成したりするなど、社会的課題解決に取り組んだ。昨年引き続き、板橋区の広報紙「広報いたばし」に学生が執筆した記事を掲載した。
 (2) 八潮市の児童が東京キャンパスを訪問し、学生が講師となって体験授業を実施した。また3月には歴史学科の学生を中心に東日本大震災の被災地で古文書を復旧させるボランティア活動を行った。
 (3) 学生サークルが、2014年から毎年「板橋農業まつり」で子ども向けブースを企画運営した。また毎月1回、大学周辺を清掃する「クリーンアッププロジェクト」を継続して行った。

4 点検・評価

CHECK

- (1) 板橋区との連携プロジェクトは、発展継続している。28年度はゼミ演習で地域課題の解決にも取り組んだ。
 (2) 板橋区以外の自治体でも活動の場を広げている。埼玉県八潮市との地域連携は、29年度の包括協定へと発展した。
 (3) 学生サークルの自主的な地域貢献活動が評価され、地域でよい行いをした「板橋区青少年」として表彰されたほか、「エコポリス板橋環境活動」でも清掃活動が表彰された。

5 次年度に向けた課題

ACTION

地方自治体と連携しての社会貢献活動を発展継続するために、東京キャンパスでサービスラーニングセンターといった専門部署を立ち上げることも検討したい。

以上

第1部

Ⅲ 学部・研究科等による取組み

4 東京キャンパス

8 図書館〔東京〕

関連委員会	東京図書館運営委員会
関連部署	図書館事務室
関連データ	

平成27年度大学年報

【次年度に向けた課題】

- (1) 次年度も図書館の利用拡大を最大の目標とする。具体的には平成27年度に実施した種々の企画をさらに推進する。特に、読書感想文発表会の参加者を倍増するため、さらに学生に周知徹底を図る。
- (2) より学生に身近な図書館としての存在とするため、学生選書コーナーの充実を図る。
- (3) 学生図書委員による図書館活性化のアイデアをより吸収しやすくするため、定期的に会議を持つ。
- (4) 今後可能であれば、4、5号館からの図書の検索なども考えていきたい。
- (5) 4図書館（室）長の会議では、今後の各図書館の特徴付けを議論していきたい。

1 平成28年度 活動方針・目標

ACTION PLAN

(1) 方針

学生及び教職員による図書館の利用頻度を上げ、もって学生の学力向上及び教員の教育・研究活動の促進に資すること。

(2) 目標

- ア 27年度入館者数は短期大学部も含め約18,000人であったが、28年度は少なくとも20,000人を目標とする。
- イ 人文学部学生貸出冊数392冊はあまりに少なく、28年度はこれを30%以上、上回ることを目標とする。

2 具体的計画

PLAN

- (1) 図書館の入館者数は短期大学部も含め約18,000人であったが28年度は少なくとも20,000人を目標とする。
- (2) 人文学部学生館外貸出は392冊と少なく、28年度はこれを30%以上、上回ることを目標とする。
- (3) 新入生を対象とした図書館ガイダンスの実施
- (4) 3年次生以上のデータベースガイダンス実施（後期）
- (5) 読書感想文発表会の淑徳祭での実施
- (6) シラバス記載の参考図書コーナーの設置

3 取組状況

DO

- (1) 平成29年2月末の入館者数は人文学部及び短期大学部を合わせ19,777名であり、3月末には約20,000人と見込まれる。
- (2) 平成28年度の人文学部学生に対する館外貸出総数は2月末現在1,504冊である。
3学年で学生数350名となり、3年生は卒論の準備にとりかかる時期と重なり、少しずつではあるが資料の収集につとめている。27年度の貸出冊数は392冊で平均1.57冊、28年度は4.39冊となり、目標の280%増しは達成できた。
- (3) 新入生を対象とした図書館ガイダンスの実施
図書館ガイダンスを人文学部5回、短期大学部13回の新1年生生全員に行った。
- (4) 人文学部3年生すべてにデータベースガイダンスを実施した。アンケート結果80名からは概ね好評であった。

(5) 読書感想文発表会の淑徳祭での実施

2回目で淑徳祭での発表学生が8人となった。発表者の他に企画構成・司会・広報・音響等学生の参加協力もあり、成功裏に終わった。

(6) シラバス記載の参考図書コーナーの設置

図書館3階にコーナーを設け、学生の利用にたいし利便性を向上させた。

4 点検・評価

CHECK

3. 取組状況(1)~(6)について、満足のゆく結果で目標を達成できたと考える。

5 次年度に向けた課題

ACTION

図書館の入館者数は短期大学部も含め20,613人であったが、29年度は少なくとも20%増の24,000人を目標とする。

人文学部学生による館外貸し出し数は1,535冊であった。29年度はこれを20%以上、上回ることを目標とする。

以上

9 自己点検・評価

関連委員会	自己点検評価委員会
関連部署	総務部、教育研究支援センター
関連データ	

平成27年度大学年報

【次年度に向けた課題】

- (1) 科研費や外部資金の導入を積極的に行なう。
- (2) 最低でも月に一回自己点検・評価委員会を開催する。
- (3) 完成年度後のカリキュラム改編・再編に向けて、教職員合同のプロジェクトチームを立ち上げて、完成年度後の教育プログラムを作成する。

1 平成28年度 活動方針・目標

ACTION PLAN

・方針

- (1) 教員各自の研究活動に裏打ちされた教育活動を行うため、個々の専任教員がそれぞれの研究目標を立て、それに基づいた研究成果を蓄積する。
- (2) 学内のみならず、外部研究資金の積極的な導入を図る。

・目標

- (1) 専任教員は全員、科研費を申請する。
- (2) 専任教員は、年一本以上の学術論文を書き、研究実績を積み重ねていく。
- (3) 単著のない教員は、早い時期に単著を公刊する。

2 具体的計画

PLAN

- (1) 学科長が学科所属の専任教員に、外部研究資金応募の書類提出を促す。
- (2) 専任教員は年一本以上の論文を、外部の学術雑誌、あるいは『人文学部論集』に投稿する。もしくは単著を公刊する。
- (3) 単著のない教員は、2年以内に単著を公刊する計画を具体化する。

3 取組状況

DO

科学研究費については、3件申請し1件が採択された。科研費による研究を、2人の教員が継続して行っている。大学学術助成金は、1件が採択された。単著のない教員に対しては、学科長が取り組みを促した。

4 点検・評価

CHECK

科学研究費の申請ならびに単著の公刊計画は目標に年々近づいている。

5 次年度に向けた課題

ACTION

引き続き、科学研究費はじめ外部の研究資金の導入を積極的に行う。各教員が教育と研究を両立させること、学部としてその環境づくりを進めることが引き続きの課題である。

以上

10 その他〔ハラスメント防止など〕

関連委員会	ハラスメント委員会
関連部署	総務部
関連データ	

平成27年度大学年報

【次年度に向けた課題】

- (1) ハラスメントは、教職員間のみならず学生間でも起こりうるので、ハラスメントを未然に防止するための学生周知用のパンフレットを作成し、学生間等におけるハラスメント防止を推進する。
- (2) 教職員研修とは別に、学内でのハラスメント防止に向けたポスター等を作成し、掲示することでハラスメント防止を推進する。
- (3) 今年度の研修結果を踏まえ、次年度研修会の内容を検討する。

1 平成28年度 活動方針・目標

ACTION PLAN

(1) 方針

淑徳大学ハラスメント防止規程に基づいて、淑徳大学構成員へのハラスメントを防止し、ハラスメントのない・起きない快適な教育・職場環境を保証するための適切な活動を行なう。

(2) 目標

- ア ハラスメントの発生を事前に防止する。
- イ ハラスメントが発生した場合には、迅速活適切な対応を行なう。
- ウ ハラスメントが発生した場合には、適切な再発防止策を講じる。

2 具体的計画

PLAN

- (1) ハラスメントの発生を事前に防止する。そのためには教職員に対して、ハラスメント防止研修会を実施して啓蒙に努める。
- (2) ハラスメントが発生した場合には、迅速活適切な対応を行なう。
 - ア ハラスメント相談員を選出し、ハラスメント防止委員会のもとで、迅速活適切な対応が取れるような体制を構築する。
 - イ 初期相談のスキルアップと相談員の姿勢・資質など、相談員に必要な研修会を実施して、相談員の相談援助技術を向上させる。

3 取組状況

DO

教職員研修会を年2回以上実施し、教職員出席率100%を目標に掲げたが、実際には年1回・出席率96%で目標を達成できなかった。

また学生への啓発活動を年5回以上実施することを目標に掲げたが、これも実現出来なかった。

4 点検・評価

CHECK

目標に掲げた数値を100パーセント達成することは出来なかったが、ある程度の数値目標は達成出来たので、評価としては可も無し不可も無しであろう。

5 次年度に向けた課題

ACTION

28年度に達成できなかった部分について、次年度では完全に達成させる。そのための具体策としては、教職員研修会を年2回以上実施し、教職員参加率も100%を目指す。

また学生への啓発活動を年1回以上実施する。

以上の2点を実施・達成させるためには、ハラスメント防止委員会の委員とハラスメント相談員とが綿密に連絡・相談・会議などを行なって、その実現を目指さなくてはならない。 以上